比叡山坂本の研究（2）
―地縁組織を中心にして―

A Study of Hieizan-Sakamoto (part Ⅱ): Focusing on inhabitant communities

SUDO Mamoru

須藤　護

概　要

「国際文化研究第15号」（2010年度刊行）では、比叡山坂本の研究（1）として「日吉山王祭と山の神信仰」というテーマで報告した。今回はその（2）になる。この研究を始めた動機は、坂本という歴史のある町に居住して10年余りが経過し、この町の住人としてさまざまな体験をさせていただいている。その中で「伝統とは何か」、「伝統を支える力はどのようにして生まれてくるのか」、「人々はなぜ伝統を守ろうとしているのか」という素朴な問題を、伝統を支える側に立って考えてみようということであった。今回は第2回目として、古い町に住む人びとがどのような組織を作り上げ、今日まで伝えてきたのか、また個々の組織はどのような機能を果たしているのかという問題を中心に据えた。

後述するように、坂本にはいくつもの組織が重複して存在しており、しかもその構成員が微妙に異なっている場合が少なくない。そして小さな組織が大きな組織へと展開し、最終的に前回報告した日吉大社、および日吉山王祭を支えるという構造をもっている。この問題は伝統的自治組織の研究にとどまることなく、災害時における共助組織など、現代社会における組織の有り方にもきわめて有効な示唆を与えてくれるであろう。

キーワード：信仰組織、自治的組織、共助組織

Abstract

It is the 2nd report on “Hieizan Sakamoto”. The report focuses on the people who live in the old town, shedding light on the communities they have maintained until today, and on the functions they carry out. Most of the Sakamoto communities overlap with each other, in different ways. Moreover, it is not exceptional that their members are somewhat different. Small communities usually develop into large ones, finally the functions of the entire organization is supporting the Hiyoshi-shurain and Sannou-festival. Sannou-festival is a representative of its kind in SHIGA Prefecture of what we have already described last year. We emphasize in this paper that they are traditional religious communities, but not only that, their contribution to the contemporary society is very effective during the time of disasters.

Keywords：religious community, autonomous community, cooperative community

1. 比叡山坂本の町

「比叡山坂本の研究」(1) と一部重複するが、坂本をとりまく歴史的・文化的環境を概観してみたい。大津市坂本は日吉大社と比叡山延暦寺の門前町である。日吉大社は比叡山の地主神としてその東の山麓に鎮座し、全国に 8000 社あるといわれている日吉神社（日枝神社）の総本社である。また延暦寺は京の都の鬼門である北東に位置し、東塔、西塔、横川の 3 塔、16 の谷に分かれ、その広大な山中に多くの寺院群を配置している。その地番は一部を除いてほとんどの領域は、大津市坂本本町になっている。

「およそ京の町人、浜の商人、鎌倉の誂へ物、宰府の交易、室・兵庫の船頭、淀・河尻の刀禰、大津・坂本の馬借、鳥羽・白河の車借、泊々の借上げ、湊々の替銭、浦浦の問丸、割符を以てこれを進上し、儀載に任せてこれを運送す」



図 1　山王曼荼羅図（理性院蔵）。上部中央の山が八王子山で、牛尾宮と三宮が鎮座する。下部に日吉の社が見える。

上記の文章は室町時代前期（14 世紀末ころ）に書かれ、当時、初等教育用に編さんされた「往来物」とよばれる教科書の一部である。この中に大津と坂本の馬借が登場する。馬借は馬の背に荷物をのせて運ぶ運送業者、割符（さいふ）は当時の「金銭預り証書」のことで、現金に代わるものとしてこの証書の信用によって荷物の運搬を依頼したという内容である。

大津や坂本は琵琶湖に面し、延暦寺や京都に運ぶ物資の集散地であり、京の町人（京都）、浜の商人（伏見、尼崎、兵庫、室津）などと共に、商業が発達し繁栄していたことがわかる。京都、奈良、鎌倉はいずれも政治の中心であった都市であり、宇治山田（伊勢神宮の門前町）、長野（善光寺の門前町）は、日本での数少ない長い歴史をもつ町（都市）であった。

しかしながら、元亀 2（1571）年の織田信長による延暦寺焼き討ちにより、山麓に位置している坂本も甚大な被害を受けた。坂本が焼き打ちに遭った理由は、老境に至った多くの高僧が山を降りて坊を営んでいたからだという。このような坊を里坊といい、当時 150 坊ほどあったといわれている。この焼き打ちにより中世以前の歴史を記した文書のほとんどは消失した。信長の死後、各地に分散していた僧侶、公人（後述）等、延暦寺の関係者が坂本に戻り町の再建が進められた。現在の町は近世に出来上がったものである。

近世以降の坂本の町は大きく上坂本と下阪本に分けられている。上坂本は比叡山の東側に位置するため京都側の西坂本に対して東坂本ともよばれ、門前町としての姿を再び整えている。比叡山の裾野は湖に近づくほど緩やかになる。そのため湖に近い下阪本は農村として成立した。さらには集落が琵琶湖に面していることから浜阪本ともよばれ、大津とともに湖上輸送の基地として役割をはたしてきた。

上坂本に関してさらに話を進めると、この町は三つの領域に分かれている。山上の延暦寺とその麓の日吉大社、御宮（東照宮）、西教寺が配置されている神と仏の領域、天台座主や老境に至った僧侶、日吉大社の社家など神や仏に奉仕する人々が居住する領域、そして庶民が集住する町の領域である。（図 1）

(1) 神仏の領域

日吉大社は八王子山（約 400 メートル）の崖の上に大磐が鎮座しており、その東側に牛尾神社（大山咋神荒御魂）、西側に三ノ宮（鴨玉依姫荒御魂）の社殿が建てられている。いずれの社も崖の下からやぐらを組んで社殿を支えており、清水寺の舞台を連想させる豪放な造りである。この二神は夫婦神であり比叡山の地主神とされている。

その麓には大己貴神を祀る西本宮（大宮）と大山咋神の和魂を祀る東本宮（二宮）を中心にして、白山（客人）、宇佐宮（聖真子）、樹下社（十禅師）が鎮座する。そして先の八王子山の二社を加えた七社を山王上七社といい、それぞれの社で神輿を備えている。西本宮に祀られている大己貴神は、大津宮造営の際に国家鎮護の神として奈良の三輪山から分祀されて神であり、地主神である東本宮よりも上位に位置している。

東照宮は日光東照宮建立の 1 年前の寛永 11（1634）年に建立されたもので、日吉大社の南の山麓に位置している。祭神は徳川家康で、中央に家康の神像、その両脇に豊臣秀吉と山王神が祀られている。日吉東照宮の建立は、延暦寺を幕藩体制の中に組み込むための施策であったとされている。また西教寺は天台宗真盛宗派の総本山である。500 年余りの歴史をもった寺院で、大津市園城寺町の園城寺（三井寺）とともに延暦寺から分派した寺として知られている。

(2) 神仏に奉仕する人々の領域

以上が上坂本の神と仏の領域であるが、その下に上記の神仏に奉仕する人々の領域が広がっている。御宮（東照宮）の真下（東側）には広大な敷地を持つ滋賀院御殿があり、この建物は近世において天台座主を勤めた皇族が代々居住したところで、御殿という名にふさわしい建物である。これほど規模は大きくないが上坂本の町の景観を特色あるものにしているのは里坊である。里坊は山上の坊に対して里（上坂本）にあるために里坊とよばれている。現在確認できるもの旧里坊を含めて 55 坊ほどである。穴太衆積みとよばれる石積み、生垣、土塀に囲まれ、静かな町の一角を形成している。比叡山から流れ出る河川の水を引き、大きな岩を生かしたみごとな庭園を備えている里坊が



写真 1　日吉大社の赤の大鳥居。この鳥居をくぐると神の領域に入る。



写真 2　神職の領域と庶民の領域に建つ石の大鳥居



写真 3　滋賀院。壮大な穴太積みの石垣に囲まれた延暦寺座主の御殿。



写真 4　滋賀院に巡幸する石動神社の神輿



写真５　坂本の町を特色づける里坊。現在里坊は 55 軒ほどをを数える。



写真８　横小路から神職の領域に入る道。この道の手前に庶民の領域が広がっている。



写真６　里坊に巡幸する神輿



写真９　横小路の通り



写真７　伊勢園、作り道から山手（西）に上る道。この通りは神職など、神に仕える人々の居住区であった。



写真 10　横小路の通り

多くみられる。

日吉大社に奉仕する社人の居住地は滋賀院のさらに下（東側）にあった。ここは伊勢園町とよばれ、延暦寺から諸役・地子免許の特権を受けていたという（吉田ゆり子「神仏分離と坂本」）。この領域までが神と仏の世界であり、東照宮からは東照宮馬場、日吉大社からは日吉の馬場とよばれる広い馬場が東に延びている。日吉の馬場は今日においても祭礼の際に使用されており、民の領域とは巨大な石鳥居で区別されていた（写真 1、2、3、4、5、6）。

(3) 民の領域

民の領域は石鳥居の下から琵琶湖に向かって東側に広がっている。石鳥居のすく下には参道と直角に交わる古い道がある。この道は「作り道」とよばれ、日吉大社の参道につながる道であり、神輿が渡御する道でもある。作り道の両側には伝統的形式の町屋が軒を連ねており、古い坂本の面影を残している。今日においても商店の多い通りであるが、近世においては旅館、茶屋、酒屋、醤油屋、菓子屋、桶屋など、さらに多くの商店や職人の家が軒を並べていたことが知られている（図 2）。（写真：7、8、9、10）

この石鳥居と作り道を境にして上ノ町、次ノ町、中ノ町、明良野田、井神町、郡園町、和泉町、作道町、大乗寺町、大和庄町等の町名がみられる。和泉町と大乗寺町を分けている井神通りに大神門とよばれる大きな鳥居が立っているが、この領域までが上坂本の民の領域となり、「上坂本四町」と呼ばれている。この鳥居まで大きな道がついているが、この先には人が1人ほど通れるほどの道しかついていない。この地区を現在は「中部」と称しており、後に述べるように日吉山王祭においては中心的な役割を担っていた。多くの町名がみえるのに、なぜ「四町」と呼ばれているのかについては明らかにできていない。

日吉山王祭の3日目、4月14日に七社の神輿が湖上を渡御するが、このときに琵琶湖の乗船場まで神輿が神幸する道は次のようになっている(図3)。まず日吉の馬場を東に進み、大神門の鳥居をくぐって南進。さらに西進し、作り道に向かう。馬場先町で左折して松ノ馬場通りをまっすぐ東に進み琵琶湖の沿岸に出る。ここを七本柳といい山王鳥居が建てられている。ここから神輿を船に載せ唐崎沖まで出て湖上において「粟津の御供」という神事を行い、比叡辻の船着場まで帰ってくる。

次に陸路を西に進み日吉大社に向かうのであるが、このとき神輿が通る町が上ノ町、次ノ町、中ノ町、郡園町である。地図をみると、神輿が渡御する道はほかの道よりも広く作られていることがわかる。さらにその道を実際に歩いてみると、神輿が通る道は角を緩やかな円を描くようにして石垣を積んでいる。上坂本の町全体が山王祭を配慮したつくりになっていることが特徴的である。

(4) 上坂本の人口と職業

元亀の兵乱(1571年)後、天正10(1582)年に織田信長が本能寺で亡くなると、僧侶や公人(くにん)が比叡山に帰り始め、御山の復興に力を注いでいくことになる。公人は正式な僧侶ではなく、山徒・下法師・下僧などともよばれ、天台座主を支える行政官であり、延暦寺を警護する帯刀人でもあった。名字・帯刀・剃髪・妻帯を許され、出納・庫主・政所・専当という役職がありいずれも公人の役割であったという(高島1978)。近世における



図2　上坂本の領域図

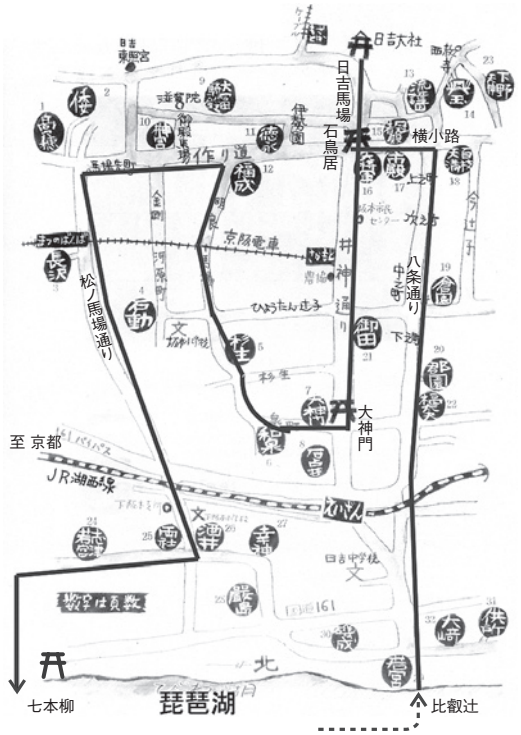


図3　神輿巡幸図
(○印の中は神社名)

公人の役割は以下のようなものであった。

①相当する堂坊に割り当てられた耕作地・耕作者から年貢を徴収すること。

②相当する堂坊の雑事を果たすこと。

③門跡および高僧と堂坊の警護をすること。

復興後の比叡山には150もの堂宇が建立されていたといわれているが、公人はその世話役として、また年貢徴収等を務める最下層の行政官として延暦寺に所属していたが、その住居は坂本にあった（写真11）。

このほか公人は、日吉山王祭の際には大きな役割を果たすことになる。山王祭では諸行事の采配を振り、御輿の警護に当たること。祭礼用度の調達、祭礼次第の推進、御鎮座神事の警護、駕輿丁の統制、祭礼見物に集まった群衆の整理などがあり、とくに御鎮座神事の際には「警護武者」として伝家の甲冑に身を固め日吉山王七社に分かれて、各社の神輿七座の渡御を警護することが公人の特権であり誇りでもあった（高島同掲書）

近世前期にあたる延享年間（1684～1687）には300人をこえる公人が存在したという記録がある（岡本文書・叡山文庫所蔵）。1家族の成人数4、5人で計算すると人口1350人を数え、これに子供を加えるとさらに人口が増えることになるという。上坂本における最も人口の多い享保～元文年間（1715～1740）は2400人程度であることから、復興当時の上坂本は公人の集落といってよく、中世の秩序を維持していたと考えられる（岡本2006）。公人は坂本の町に居住し、延暦寺の勢力を背景にして町の上層部を構成していたのである。

しかしながら年を経るにつれ公人の数は減少し、寛政12（1759）年には68名、天保12（1841）年には26名まで減少し、その間、他の地方から入ってきた商工業者も加わって坂本は延暦寺と日吉大社の門前町としての性格が強くなっていく。近世初期には21坊であった里坊（前出）は、中期に至ると80坊あまりに増加し、その後徐々に減少するものの坂本の町を特色あるものにしている。



写真11　坂本に残る公人屋敷（旧岡本家）

近世における上坂本の人口は移動が激しかったようで、享保17（1732）年2492人であったものが、寛政期（1789～1800年）には2000人ほど、化政期（1804～29年）は2100人台、天保11（1840）年1907人となっている（新大津市史1963）。ただしこの数字は僧侶や神官の人口が含まれている可能性が高い。これにたいして町に居住する住民の人口については、元文3（1738）年の記録がある。これによると上坂本四町は、男841人、女797人、合計1638人となっている（吉田1998）。1世帯4、5人の家族と想定すると360世帯ほどになる。当時は公人の割合が減少していく時代であった。

時代は100年ほど下るが天保13（1842）年の統計では、上坂本には多くの農民と商工業者が居住していたことがみえている。この年の上坂本の世帯数は264世帯となっており、この100年の間にかなり人口も世帯数も減少しているが、その理由は明らかではない。

天保13（1842）年における上坂本の戸数は264戸、人口1907人（天保11年）で、職業構成は農業200戸（内専業61戸）、浜坂本の戸数314戸、農業277戸（内専業170戸）で、いずれも農業が非常に高い比率を占めているが、専業農家の割合が低い。上坂本の264戸のうち農業を含めた専業は91戸であり、そのほかの家は何らかの形で兼業をしている。そのほか大工、左官職、杣・木挽職、材木商、表具職、建具職、指物師、屋根職、塗師、箍職、黒鍬職などの職業が目立つ。これらの職業も兼業率が高いが（専業率24%）、数多くの堂塔坊舎もつ門前町としての性格がよく現れている。また米屋、酒造業、醤油業、塩・麹・酢・炭の販売、八百屋、豆腐屋、雑貨屋、煙草屋、荒物屋などの職種も多く見え、一般の農村に比べると町としての体裁を整えていたことを示している。その一方で、人口の推移を見ていくと、住民

の移動が激しかったことが推測できる。

さて坂本の町の構成を職業別にみていくと、農業に従事している家は264軒中200軒で、75.8パーセントを占めており、そのうち専業農家は61軒である。上坂本が農村としての性格がつよかったことがわかる。農業以外の職業をみていくと56種類を数え、なかでも建築、装飾関係の業種が目立ち、延暦寺や日吉大社をはじめとして多くの宗教施設を有する門前町坂本の特徴を表している。具体的には材木商4、杣・木挽き職14、大工職11（5）、建具職3、指物師3、屋根職4、瓦師1、左官職3（1）、錺（かざり）職1（1）、表具師2、塗師4（1）、鍛冶屋4などがみえている。（ ）内の数字は専業者数をあらわしたものであるが、専業者が少ないのは農業との兼業ではないかと推測している。そのほか宿屋7、茶屋1なども門前町の特色を示すものである。また現在の坂本には畳屋が4軒ほどあり、造園業も多い地域であるが、この資料には畳職、植木職などの業種はみられない。

建築、装飾関係のほかに荒物屋、古手類、古道具、傘屋、下駄屋、団扇屋、桶屋、籠屋、紺屋、蝋染師、雑貨屋（筵、簾、縄、草履、草鞋）、炭屋などの日常生活用品を売る業種がみえているが、これらも兼業が多い。また、食料品を扱う業種は米屋、酒造業、醤油業、塩・麹屋、八百屋、干物屋、塩肴屋、豆腐屋、菓子屋などがみえ、嗜好品として煙草やお茶を売る店がある。いずれも兼業が多いが、純粋な農村ではなく町的な性格を持った地域であることがわかる（新大津市史1963）。

これをさらに町内別、職業別にみていくと以下のとおりになり、それぞれの町の特性をみることができる。比較的農業人口の比率が低い町は次之町（42％）、上之町（62％）、郡園町（66％）、大乗寺町（73％）、作道町（75.6％）で、一方農業の比率が高い町は大和之庄（100％）、明良野田（85％）、和泉町（81％）、そして中之町と井神町は79％となっている。図（地図：2）で示したように、神輿が渡御する道に面した町や日吉大社および延暦寺の参詣路にあたる町の農業人口が低く、商工業に携わる人が比較的多いことが分かる。

上之町、次之町、中之町は延暦寺再興の際に、



写真12　八丁通りの上之町界隈



写真13　琵琶湖岸からの主要な参拝路である作り道。この道の右側が比叡山側になり、神職の領域になる。

各地方からやってきた僧侶に付きそってきた家が多いといわれている。定着は近世初期のことであるが、坂本の旧家といわれている家である。また作り道町は主要な参詣路であり、神輿渡御の道に面した町で、ここには種々の商工業者のほかに宿屋7軒と茶屋1軒あったことがみえている（写真：12、13）。

時代が下がるにしたがって職業に大きな変化がみられるが、今日においても町の中に住居を構えて商店を営なみ、また職人やサラリーマンであっても郊外に広がる水田や畑を持っている人が少なくない。農業との兼業形態が今日なお続いているのである。近世から近代にかけて、このような人々が坂本の祭礼を支えていた。

2. 町人の組織

(1) お組と日待ち組

近世における坂本の町は、初期においては公人の町の観があり、中期以降は農・工・商に携わる人々が増加していくことにより、里坊に居住する僧侶、公人、そして農民、職人、商人が居住する

門前町として再生していく。ここでは主に庶民の領域である井神町、和泉町、開町を中心にして、庶民が力を合わせることで暮らしを守り、豊かな人間関係を築いてきた組織について記していく。しかしながら坂本の近隣関係は非常に複雑であるため、小さな組織から検討を始めて、複雑に絡み合った組織を徐々にときほぐしていきたい。井神町、和泉町、開町の3町を合わせた地域を現在5区（後述）とよんでいる。開町は新たに開かれた町である。

(2) お組

日吉山王祭と坂本総祭りを支える最小の組織は「お組」と「講仲間」である。お組は主に冠婚葬祭が生じた際にお互いに助け合う仲間のことで、今日では多少の組替えが行われているが、古くは5人で一つの組を作っていた。近世における5人組が単位になっていると考えられる。人は生まれてから死ぬるまで多くの儀礼を行なってきた。人の一生を概観するだけでも、誕生、七五三、入学、卒業、元服（成人式）、結婚、厄年、還暦等の祝、そして葬送儀礼を経て人生を閉じることになり、この一連の儀礼を通過儀礼と呼んでいる。

通過儀礼のうち、お組が関わる主な儀礼は結婚、子供の誕生、葬式である。たとえばお組の構成員の中で結婚話がまとまったとする。その家の息子が嫁をもらう場合は一家の主人が、また組内の娘が嫁に行く場合は構成員の妻が対応することになっている。いずれもお祝儀を持っていくのであるが、嫁取りの場合は結婚式と披露宴に一家の主人が招かれる。それも来賓として上座に座ることになっている。嫁入りの場合は結婚式の前に組の妻たちが招かれて披露がおこなわれる。お嫁さんの顔見せである。その席では食事が出され、さらに豪華な引き出物が配られる。

お組のもう一つの大きな役割は葬送儀礼への参加である。構成員に不幸ができるとまずお組に知らせが来るので、その晩のお通夜に参列する。そして僧侶とともに翌日の葬式の準備の手伝いを行なう。葬式用のわらじ編み、松明作り、穴掘りなどがその仕事であった。わらじは死者のものと、葬送儀礼に参列する者の分を作らなければならない。松明は竹を割いたもので直径20cm、長さ3尺（約91cm）ほどのものを1本作る。葬列の先頭に立ち明かりをとるためである。穴掘りは、幅2尺4寸（約72cm）、深さ4尺（1.2m）ほどのもので、これを死寸（しにすん）といった。このような葬式の準備は主にお組の構成員が行なったようである。またお棺は大工が作ったという。お通夜や葬式には、生前に縁のあった多くの人々が参列するが、そのような人々の接待は葬式を出す家の分家や奥さんの実家など親せき筋の女性たち、そしてお組の女性たちが受け持つことになっていた。

しかしこのあたりでは、昭和60年代には土葬から火葬に変わっていき、また結婚式や葬儀は家で行なうことがなくなり、業者に任せることが多くなった。そのため組の者が葬儀に深く関わることがほとんどなくなり、せいぜい葬儀社まで出向いて受け付けや会計などを受け持つ程度になった。その妻たちも同様であるが、お組の者はどのような仕事や約束ごとがあろうとも、結婚式や葬送儀礼のすべてに参列する人が多い。今日、お組の役割は大きく変化しているが、坂本においてはなお強い人間関係を保っており、むしろ遠い親戚よりも深い関係が築かれているように思う。

坂本に限らずかつての日本の近隣社会では、お組のような組織は存在した。それは皆が、人間がよりよく生きていくために行なう一連の儀礼を大切にしていたからであり、そのような儀礼に深く関わることで、自分の家が当事者になった際には、多くの人々に助けてもらえるという安心感を求めたからであろう。その関係が近隣の絆を強め、お互いを確認することにつながっていたのである。しかしこのような関係は、一面において、煩わしく感ずることがあったことも事実である。

(3) さまざまな講

お組とは別に信仰を基盤とした組織に講組がある。坂本では伊勢講、愛宕講、山王講、彼岸講（念仏講）などの講が行なわれており、その形態は何度かの変化を経験しながらも、今日まで続けられている。伊勢講は1月14日、愛宕講は1月23日、5月23日、9月23日、これらの日に加えて半夏にも愛宕講を行う組もある。伊勢講は11月にも行われていたようであるが、今日では伝承

されていない。また正月 14 日に行われる伊勢講をとくに「日待ち」といっており、日待ちと愛宕講は継承している組や町内は多い。これとは別に坂本では公人衆だけが集って行う山王講も存在していた。

日待ちは信仰を同じくする者が日を決めて 1 ヶ所に集り、当日の夕日を送り翌日の朝日を迎える儀礼で、日本各地で行われていたことはよく知られている（柳田 1963）。この日待ちを行なうほかにバスを仕立て、講の者の有志が伊勢参りに行く組もありその形態は様々である。1 月 14 日の夕方当番の家に集い、所定の行事を終えると朝日が昇るまで時間を過すのであるが、日待ちの当番が持ち回りで管理する文書箱の中には、花札やトランプが入っていた。

各講組は異なった様相を呈しているので、ここでは比較的調査が進んでいる講を仮に「講 1」として、この講組を中心に話を進めていく。「講 1」では大正 6 年に伊勢講、愛宕講、山王講を合併して、その後は 1 月 14 日に日待ちと称して講を行なっている。山王講には「山王曼荼羅」、愛宕講には「愛宕山大権現」、伊勢講には「天照大神」の掛け軸を床の間に飾り、掛け軸の前にお神酒、水、米、塩、そして灯明をのせた三方を置き、講員がいただくお神酒をその脇に添える。中央に山王曼荼羅、その左に愛宕山代権現、右に天照大神の掛け軸をかけるので、地元の神である山王信仰が重きをなしていたことがうかがえる。また神様の掛け軸とお供物の前で般若心経を三巻唱えることになっており、神仏習合の慣行が今日なお残っていることが興味深い（写真：14、15、16）。

上記の講員が共通のメンバーである場合と、それぞれの講でメンバーが異なる場合がある。「講 1」はたまたま共通のメンバーであったために、3 つの講をまとめて行うことが可能であったが、後者の場合は従来どおり、それぞれの講を定められた日に行うことになる。たとえば「講 2」の場合は日待ちを 1 月 14 日に、愛宕講を 1 月 23 日に行っている。

その日の夕方、当番の家から各家に「風呂がわきました」といって触れてまわる。この役は当番の家の主人が行うことになっている。案内を受けた講組の者は、着替えと着物を持って集る。当番の家は風呂を沸かして来訪者を座敷に迎え、まずお茶とお菓子がだされる。今日では皆自宅で風呂に入り、身を清めてから着物、羽織姿に身を整えた講員が互いに誘い合って当番の家を訪れるのであるが、今日においても皆和服姿で講に参加するのは、当番の家で風呂に入る伝統が残っているからだという。お茶をいただき、いっときが過ぎる



写真 14　日待ち。この組は日待ち、愛宕講、伊勢講を統合して、1 月 14 日に行なっている。



写真 15　日待ち。床の間に下げられた掛け軸に向かって般若心経を唱え、それがすむと夜が明けるまで語り明かす野が通例である。



写真 16　愛宕講の掛金覚帳。掛け金は当日の食事代、代参の費用として使われる。

と全員が床の間に向かって般若心経を唱える。3つの講をまとめて行っているが、般若心経をやはり3巻唱える。これがすむと、昨年1年に起こった出来事を簡単に記述し、会計処理を行い、愛宕講の場合は代参をする当番を確認して担当者に代参料をわたす。その後座卓に向かい酒を酌み交わし、食事をしながら明け方まで過すのである。

〈愛宕講の食事〉

愛宕講で出される膳は定められており、当番である宿が準備することになっている。昭和2年の御田町上組の「町内取決覚帳」によると三種の肴、豆腐汁、平、したし物、煮しめ、酒、飯となっている。三種の肴は、白豆、スルメ、タタキゴボウの三種で、白豆は大豆をゆでたものである。正月14日の日待ちには、このほかに数の子、ゴマメなどが出される。酒は当番が用意するが、その代金は講員が平等に負担する組が多かったようである。また米は各自が3合ずつ持ち寄ることになっていた。この取り決めを順守することと書かれている。昭和2年以前はどうなっていたのか不明であるが、経済面での宿の負担を軽減することが目的であったようである。

その後徐々に質素な膳になり、昭和18年になると日待ち膳部は取りやめ、お神酒5合、茶と茶菓子、愛宕社代参3円、昭和19年はお神酒1合のみ、となっている。そして昭和30年になると、会費制となり各戸あて200円と白米2合を当番が集め、そのうちの500円を代参にかかる経費とし、残りを酒食費と油代に充当すること、酒は2升用意することとある。代参料は愛宕山までの交通費と講員全員のお札代である。その後徐々に徴収する金額が増加していき、「講1」の場合は、宿に当たった家が講員から4000円ずつ徴収し、3000円を酒と食事代にあて、1000円を代参料として代参の当番に渡す。当番の家で作るのは三種の肴くらいであり、そのほかの御馳走は仕出し屋に頼む組がほとんどになった。当番によっては特別に用意する場合があるが、次の年の当番の負担になるため、あまり派手にならないよう心がけているところが多い。

〈愛宕さんの注連縄〉

愛宕講にはもう一つ重要な儀礼がある。宿にあたった者が注連縄をない御幣をつけたものを日吉大社にもっていき祈祷をしてもらう。注連縄の長さは親指と人差し指の間から腕までを一巻きとして、それを11回巻いた長さというから7メートルほどになる。それを宿に持ち帰って三方に載せて、床の間に吊るした掛け軸の脇に置く。会食が終わって皆が家に帰るときこの注連縄を真ん中から切り、上に帰る者と下に帰る者が1本ずつ持ち、一番上の家と一番下の家の前の道をふさぐようにして張り、今年も災難が起こらないよう祈願する。そして上の家の上側の壁に、下の家は下側の壁に愛宕さんのお札とともに飾っておく。

注連縄が飾られた上と下の範囲が愛宕講の組の範囲であり、注連縄をはったなかで火事をはじめとした災難が起こらないようにということであろう。その隣の組はまた同じことをするが、今日ではこのような儀礼をする組は少なくなった。前年の注連縄は翌日のサイノカミの際に燃やすことになっている。

〈代参〉

愛宕講は火の神様である愛宕神を崇敬する人々の集まりで、京都の愛宕山が信仰の対象になっている。代参の順番がまわってくるとなるべく早い時期に愛宕山にお参りに行き、お札とシキビの枝をもらって帰り、講の人々に配布する。愛宕山代参に行く日は決まっていないが、信心深い人は1月中には出かけるという（写真17、18）。

愛宕山へは清滝をへて登山する。清滝からは3ヵ所の上り口があるが、愛宕神社まで登り参拝して帰るまで半日はゆうにかかる。まだ雪が積もっている年などは相当難儀をするという話も多い。なるべく早く代参に出かける理由は、愛宕様が火の神様であるからで、愛宕講の後にかりに講組の家から火事が出た場合、代参をする人がその役割を果たしていなかったことになり、申し訳が立たないからであった。ところが近頃はそのような考え方がうすらぎ、4月になってから、あるいは5月になってから出かける人も多いようである。代参のほかに「総参り」といって、講員の家族が揃って日時を決め、愛宕山にお参りする組もある。総参りは子供や女性が参加するので、1日がかりのお参りになる。

なお、女性の世帯は代参が免除されており、前年に不幸があった家は出席できないことになって

いるが、般若心経が済んだ時点で出席できるという取り決めが、昭和 43 年になされている。

先にみてきたように、山王講は年 1 度に加えて 11 月に日吉大社の山王講があり、愛宕講は年 3 度に加えて代参があり、伊勢講は年 1 度にやはり代参が行われる。したがって、年に 5 回ほど宿、もしくは代参の役割がまわってくることになる。さらに毎年御田神社の例祭（後述）と日吉大社の例祭が行われるので、少なくとも月に 1 度はこのメンバーが顔を合わせることになる。加えて組内で冠婚葬祭が生じたときは、数日間はこれにかかわるので、皆が顔をあわせる機会がさらに増える。



写真 17　京都府亀岡の愛宕神社。この神社には湖東の人々が多く参拝する。



写真 18　愛宕神社に代参する者はお札とシキビを持ち帰る。

(4) お組と講組の構成員の変化

今日の講組はお組よりも人数が増えており、10 名前後で構成している例が多いが、古くは 5、6 名が一つの単位になっていたようである。先に示した講組のうち愛宕講の関心がとくに高かった。家が密集しているので、火事たいして警戒心がつよかったものと思う。したがって、愛宕講に関しては明治期からの資料が保存されており、その当時の構成員や儀礼の内容についてはさらに具体的にすることができる。

たとえば先に記した愛宕講の「講 1」を例にとってみると、明治 24 年以前の段階では講員は 6 名で出発している。それが明治 25 年以降は 8 人の構成になっている。明治 24 年から 45 年まで記録されている『愛宕講掛□並ニ勘定帳』（御田町 1891）によると、Na 家、To2 家、Ki 家、Ot1 家、Yo2 家の 6 名の名がみえ、明治 25 年以降新たに Ok2 家、Mi 家が加わって 8 名になっている。

愛宕講とお組の構成員を比定してみると、「お組 1」に加わっている家は Na 家、To2 家、Ki 家、Ku 家、Uz1 家の 5 名である。4 名までは「講 1」の構成員と名前が一致するが、残りの 1 名は異なっている。また「お組 2」をみると、Ko 家、Oh 家、Ku 家、Yo2 家、Ot1 家となっており、「講 1」に属していた Yo2 家と Ot1 家の 2 名は「お組 2」に属している。愛宕講とお組の構成員が微妙にずれていることがわかるが、その理由はわかっていない。また Ku 家は「お組 1」と「お組 2」の両方の組に属しているが、その理由もわかっていない。ここでは互いの構成員にずれが生じていることだけを述べておく。

なお、後にこの問題をもう一度検討することにするが、事例としてもう一つ「お組 3」の構成員を上げておくと、Na 家、Ha 家、To2 家、Ym 家、Sh 家（後に Wa 家）となっている。このうち Na 家と To2 家は愛宕講は「講 1」に属している。

明治 30 年の「講 1」は 3 名増えて合計 11 名の構成になり、それが昭和 9 年まで続く。この間大きな変化がある。それは大正 6 年から、今まで 1 月、5 月、9 月の 3 回おこなっていた愛宕講を年 1 回とし、山王講と伊勢講をも統合して 1 月 14 日に行うというものであった。これまでの伝統を

大きく変えることになったが、その理由は経済的な問題が大きかったようである。また昭和2年から当屋と代参のほかに、「二十日寄合当番」という役が新設され、毎年2名ずつ交代で務めるようになったことである。1月20日にも寄合があったようであるが、具体的なことはわからない。

講員に関しては、昭和10年に1名が退会して10名になり、昭和13年から17年9名、戦中・戦後にかけても講は続けられ、昭和18年から24年までが10名、25年から12名に増えるなど、小規模な入会、脱会がみられる。その後の講員の変化についてはさらに入・脱会が煩雑になるので省略するが、昭和31年、32年、33年は最高の15名を数え、その後は昭和50年まで14名で推移している。今日では歯が抜けたように構成員が減少し、「講1」に関しては、8名で山王講、愛宕講、伊勢講を合わせて毎年1月14日に行っている。また「二十日寄合当番」は昭和31年から取りやめている。

このような講員の変遷過程をみていくと、時代の変化に対応しながら伝統的行事が続けられていること、そして古い町であるのにもかかわらず、意外と人の出入りが激しかったことがわかる。それは坂本が門前町であり、多様な職業をもった人々で講が形成されていたことによると思われる。入・脱会の主な理由は世帯主の交代と転・入居である。

前出のお組と講組の構成員の多くは重なっているが、微妙にずれていることも珍しくない。現在、私が所属しているお組は、Tu家、Sa家、To2家、Ya家で構成されており、私の家を含めて5軒になる。ところが講組の構成員はお組のうちTu家が抜けているがMi家、O家、Ku家が加わっており、合計7軒になっている。この時点での講員は、昭和30年代前半の約半分に減少しており、大きな変動がみられる。その理由については2つのことが考えられる。

すでに述べたように、農家が多い半面町的な様相が強い坂本では人の出入りが比較的多く、したがってお組や講組の構成員の出入りも多くなる。この伝統は今日でも続いているようである。私が坂本に居住している10年の間でも、2軒が何らかの事情で坂本を去り、他所からやってきた2軒が新たな住人として加わった。また住人はそのままであるが、2軒の商店が店を閉じている。

もう一つの理由は、町内での紛争を避けるためではなかったかと考えている。各町内に同じメンバーで同じ組が永続的に固定された場合、組ごとの対立が生じた場合解決が難しくなる。組の構成員が微妙に入れ替わることで、この対立を和らげている事例がいくつか確認できるからである。ここでは具体例をあげることはしないが、たとえば水田の用水管理、水争い等が問題になるであろう。

(5) 町の組織とお日待ち

日待ちは1月14日の夜から翌15日の朝方にかけて行なわれる儀礼であるが、町の重要な役を決めるための大事な行事でもあった。この日は町内の重要な役職の一つである「年番」を選定する日でもあった。この行事は現在では消滅してしまっているが、上坂本の井神町、和泉町、開町を例にとって再現してみる。当時井神町は24、5軒、和泉町は11軒、開町は10軒ほどで構成されていた。古くは、日待ちは現在行われているような小さな集団ではなく、町を単位として行われていたものであったらしい。したがって、井神町、和泉町、開町の構成員がそれぞれ日待ちの単位であったことになる。

この日待ちの場において、町の行政にかかわる重要な行事がおこなわれたのである。今日、町内の重要な役職は、会長、副会長、会計があり、これを三役と呼んでいる。この三役と同様、町の運営に欠かせない役として2名の「年番」あり、この年番が日待ちのときに決められるのである。年番は三役を補佐し、町内の細々としたお世話をする役で、通常40歳代前後のものが選ばれることが多い。先の井神町、和泉町、開町の3町は、上組と下組に分けられており、上組から1名、下組から1名の年番が選出される。井神町が上組で、和泉町と開町が下組になる。

年番の最も重要な役割としては、日吉山王祭の4月13日（2日目）に行なわれる「花渡り式」(注1)の準備である花つくりと、その花を持って稚児とともに練り歩くことである。花は10kgほどもある重いものであるから、少なくと

も 40 歳前後の人でないと勤まらない。年番にとってこの日は、重要な役を披露するハレの日でもあった。

1 月 14 日の夜 8 時ころになると、前年の年番が拍子木をたたいて時刻を知らせる。それぞれの町の日待ち仲間はあらかじめ年番の候補を挙げておき、投票用紙にその名前を書いておく。拍子木の音が聞こえてくると、日待ち講の代表が年番の元に講員から集めた投票用紙を持っていき、前年の年番の前で開票して新しい年番を決めることになっていた。この年の年番が決定すると、旧年番と新年番が各日待ちの宿を訪れる。旧年番は昨年世話になったお礼を述べ、新年番は今年度の協力を要請する。日待ち宿には講員が勢ぞろいしており、歳の順に正座をして待っている。そこで挨拶を済ませると、町中の者が承認したことになる。今日においても年番という制度が継承されており、40 歳前後の 2 名の年番（現町内会長）が決められるが、自治会長が年齢と町内のバランスを考慮して選定し、頼みに行くことになっている。

〈オセンド〉

日待ちのほかに町単位でおこなわれてきた行事に「オセンド」がある。オセンドは「お千度」の文字が適当であり、「お百度」も同じような意味として使われている。この行事が和泉町に残っていた。オセンドは山王祭の最後の日（4 月 15 日）に、お祭の際に作ったご馳走の残りを重箱につめて大杉とよばれる場所に集う。大杉は日吉大社の参道を挟んで南側の小高い丘に大きな杉が自生しているのでこの名がついた。この大杉は神仏の領域と、神仏に奉仕する人々の領域を分ける大鳥居のすぐ脇に立っている。

大鳥居をくぐると、延暦寺の再興に尽力された元三大師のお堂が建てられているが、和泉町の当番はそのお堂にさまざまな願いが書かれた 1000 本の竹の串を持っていく。竹串は町内で所有しており、当番から次の当番へと引き継がれていく。元三大師堂に運ばれた竹串を家族や親しい人の数、数本を持って西本宮に納め、家族の健康や五穀豊穣を願うのである。それがすむと大杉に集い、家族や知人とともにご馳走を開き、酒を飲んで楽しいひと時を過す。折から桜が満開の時期であり、花見を兼ねていたのではないかと思う。この行事が終わるとそろそろ田植えの準備が始まるのである。「オセンド」は「ゴエンマツリ」ともいわれており、すでに 50 年ほど前に途絶えているようで、この話は和泉町でしか伝承されていない。

3. 日吉御田神社の氏子組織

以上みてきたようにお組と講仲間は、信仰を同じくした者同士が一定の日を決めて集う年中行事であり、すべての人が確実に迎える人生儀礼において互いに助け合うというシステムである。町の行政を進めていく上でも重要な位置を占めてきた。お組や講組の組織は、日吉大社の境外社に位置づけられている神社の氏子組織と密接につながっている。坂本には日吉大社が鎮座していることはすでに述べたが、日吉大社には直接の氏子は存在しない。各地区には鎮守が祀られており、その祭日には大社の神官が派遣される。住民は各地区の神社の氏子に属しており、この神社を通して大社とのつながりを持っているのである。

上坂本には氏子を擁している神社は 22 社を数える（図：4、5）。この氏子の単位と日吉大社の大祭である山王祭を支える組織の仕組みについて、日吉御田神社を例にとって述べてみたい。御田神社は坂本 6 丁目に鎮座する神社で、祭神は瓊々杵尊、その妻は木花咲比売とされている。社前には御影石の井戸枠で囲われた井戸が掘られている。この井戸が信仰の対象であり明治初期までは井神神社と称されていた（数野 1989）。現在でも御田神社一帯を井神町といい、神社の前の通りを井神通りとよんでいる。

御田神社の氏子は上組、中組、下組、北組、南組の 5 つの組に分かれている。古くは上組、中組、下組が氏子の範囲であり、北組と南組は後に加わった氏子であるといわれているが、その年代は明らかではない。今日では新たにこの地域に居住する家が増えたため、「中組Ⅱ」という組もできている。2006 年度の記録によると、御田神社の氏子は上組 9 名、中組 6 名、中組Ⅱ 6 名、下組 6 名、北組 8 名、南組 14 名、合計 49 名で構成されている。この 5 つの組が毎年交代で宮番組を受け持つことになっており、5 年に一度宮番組がま

わってくることになっている。宮番組のうち順番に宮番の責任者がまわるので、たとえば6人の組であれば30年に一度は宮番の責任者としての役を務めることになる。10人の宮番組であれば50年に一度ということになる。一代のうちに一度は宮番がまわってくるような状況である。毎年5月の総祭りの直会（後述）がすんだ後に宮番組の引継ぎが行なわれる。宮番とその組の役割については、次項の「御田神社の年中行事（総祭りを中心にして）」の中で概略を記した。この項では御田神社の氏子組織と、先に記したお組および講組、そして井神町、和泉町、開町の町割との関係について考察してみたい。

昭和35（1960）年の氏子人名簿では上組14名、中組13名（内1名は脱退）、下組9名、北組11名、南組17名、合計55名が記録されている。そして各組の名簿とお組（講組）の名簿を照らし合わせてみると、その顔ぶれはほぼ一致する。

たとえば上組は14名で構成されているが、同じ昭和35年の「日待ち勘定帳」にはやはり14名の講員が記されている。その中で同一人物、もしくは同一の家族と思われる者は11名を数える。基本的には御田神社の氏子の組と、日待ちの組は重なっているのであるが、その構成に微妙なずれがある。11名を除く残りの3名は上組ではなく中組に属しているのである。前述したように何らかの理由があると思われるが、はっきりとした理由はわかっていない。現在上組を基本とした日待ち組は8名である。6名が転居、もしくは何らかの都合で脱退したことになるが、そのうち6名が上組、2名が中組に属していて、その微妙なずれはここでもみられ現在なお続いている。

4. 御田神社の年中行事（総祭りを中心にして）

御田神社の年中行事は春の例祭（総祭り、5月2日・3日）、土用祭り（7月土用の入り）、新嘗祭（11月26日）、綱引き（1月15日）、祈年祭（2月19日）が行われている。古くから農耕祭祀が伝承されており、とりわけ1月15日に神前でおこなわれる綱引きは、農耕の予祝儀礼を象徴する行事である。また春の例祭はこの日に各地域の鎮守が祭りを行うので総祭りといわれている。この総祭りについて、宮番および宮番組がどのような作業を行うかその概略を述べてみたい（写真20、21、22、23）。

（1）春の例祭（5月2日）

この日は朝7時過ぎから祭りの準備が始まる。まず御田神社氏子の青年組が神社の入り（鳥居の外側）に一対の提灯を立て、次いで鳥居までの間の庭に左右それぞれ3本ずつ、合計6本の提灯を立てる。その後9時から宮番組のメンバーが集り、祭りの準備が始まる。境内の掃除は宮番によって定期的におこなわれているが、境内には2本のクスノキの大木がそびえ、そのほか数本の樹木が植えられているので、大量の木の葉が舞い落ちる。この日は特別きれいに掃き清め、境内の玉砂利を両脇によせておく。宵宮に参拝に来る人々のために夕方から本殿の前で火を焚くためである。焚き木は大きな松の根を使うが、これはあらかじめ青年組が山から掘り起こしてきたものである。

境内がきれいになると神輿倉から神輿を引き出して飾り付けをする。神輿は木製の屋根や側板で保護されているので、それを丁寧に取り外し外へ出しシギの上に据える。飾り物は一つ一つ桐の箱に収められている。神輿の四隅に蕨手をはめ、その上にそれぞれ鳳凰を取り付け鈴縄を巻いていく。鈴縄は蕨手と神輿の担ぎ棒を固定し、縄をねじりながらきつく締め上げていく。ついで神輿の頂上に大きな鳳凰を取り付け、鈴縄に鈴を取り付け、正面には御田神社と彫られた額、側面（4面）に1対の鏡（合計8枚）も取り付ける。次第に立派な神輿ができあがっていく。

その間、宮番は本殿をきれいに拭き払い、提灯をさげるなどの飾りつけ、鳥居に掛けられた注連縄の御幣、井戸やご神木にかけられた注連縄の御幣を新たなものに取り替えるなどの作業をおこなう。

神輿の飾り付けが終わると、雨や風にあわないようにもう一度倉の中へ神輿を運び入れる。この年（2007年）は折から小雨が降り始めており、それまでに作業が終わったことを喜んだ。神輿が納まるとその正面に提灯をさげ、奉納と染め上げられた紫色の幕をたらして礼拝をおこなう。翌日この神輿は神主によって神霊が移され、町内を巡



図４　坂本の神社配置図。中部駕輿丁は大将軍、御田、杉生、大神門、和泉、石占井、大冨騎鈴、徳永、福成、榊宮、石動、倭（森本）、長沢の各神社の氏子集団で構成されている。

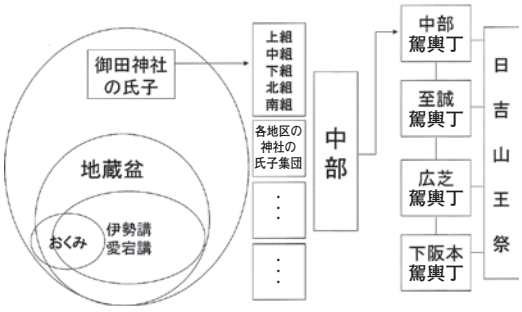


図５　氏子の組織



写真 19　地蔵盆。お組、日待ちの組がいくつか集まり、地蔵盆の組が構成されている。



写真 20　御田神社の綱曳き行事。氏子が参加して綱をなう。



写真 21　綱曳き。上と下に分かれて３回曳き、下が勝てば豊作、豊漁となる。



写真 22　夏至祭り（御田神社）。この祭りは境内の井戸に感謝するとともに、疫病退散を願う。



写真 23　井戸の上に供えられた供物。米、酒、水、そして大きな餅と魚が供えられる。

行する。祭りの準備の最後は宵宮に燃やす大きな松の根を本殿の前に引き出し、篝火の準備をして午前中の作業が終わる。この間約3時間ほどであった。そして一時解散する。

午後5時半に宮番の組が神社に集り、本殿の前の篝火に火をつける。宵宮の準備である。今年新たに用意した松の大きな根を中心にして、前年、その前年にもされた大きな木の根をまわりに配置する。この年の松の根は大きなもので、およそ60年の年輪を数えた。根を掘り出してから数年おくと松脂がつよくなってよく燃えるという。その言葉通り30分ほどで火が全体にまわり、勢いよく炎を上げている。

宮番はお参りに来た人々に振舞う酒と、酒の肴であるゆでた大豆、シラウオ、裂きイカを用意する。お参りに来た人のために篝火のまわりにゴザを敷き、そこに座りながらしばらくの間勢いよく燃える火を目の前にして雑談にふける。よくいわれるように、火を見ていると不思議に飽きないものである。

宵宮のおまいりに来るのは7時過ぎころからであるというので、火の番にあたる3名を残して、あとの者は食事をするために一時家に帰る。

午後7時過ぎ、最初にお参りに来たのは今年度宮番を勤める方で、ひととおりの儀礼の段取りを確認しておく必要があり、例年次の宮番にあたる人はこの日のお参りを欠かさないという。

その次にこられた方はこの地区の長老であった。宮参りがすんだ後、宮番組みの1人がお神酒と肴を持って長老の元へ行く。長老はゴザの上に腰をおろし、しばらくの間歓談する。話の内容は今年の暮れに造っておかなければならない宮の正月飾りのことであった。その後数人がお参りに来たが、9時を過ぎるまで6人ほどを数えるのみであった。ところが9時過ぎから続々とお参りに来る人が増え、一時は境内に活気がよみがえった観があった。例年より出足が遅かったようである。今年度は例年のように合計で20数名がお参りに来たことになるが、例年宵宮に来る人はほぼ決まっているようである。

大きな松の根は赤々と燃えさかり、さらに薪をくべて火を絶やさないようにする。その火を囲んで人々は本殿にお参りし、お神酒を飲み、伝統的な肴であるゆでたダイズ、シラウオなどを口にしながら話題はまず篝火のことになる。「今年はいい肥松を取ってきたなぁ、よう燃えるわ」「近頃こんなによく燃える篝火はなかったのではないか」といった話から始まり、その後長い時間歓談する。神前で赤々と燃える大きな火を囲んで氏子たちが集い、神とともにゆったりとした時間を過す。7時ころからはじまった宵宮は、11時近くにようやく終わる。結局宮番の組は篝火に火をつけてから、5時間余りの間お参りに来る人々の接待に立ち会うことになるが、これが日吉御田神社春の例祭の宵宮である。

(2) 春の例祭（5月3日）

午前10時に宮番組は御田神社の境内の太鼓を打ち鳴らし、祭りが始まることを町内に知らせる。次いで宮番が手分けをして氏子の家を1件ごとに回り、11時から祭りの儀式が始まることを告げる。11時に日吉大社の神主が御田神社に到着する。宮番の家からきれいに着飾った女のお稚児さんが3人、神饌を載せた大きな膳を携えた大人たちに庇護されるようにして御田神社に向かう。稚児は大人たちが持った膳の下を歩く。本殿の前までくると、先頭の稚児の付き添いが神前に供える。その後神主が祝詞をあげ、上組、南組、中組、北組、下組、青年会の順に玉串を奉納し、最後に宮番が玉串を奉納する。その後先頭の稚児が本殿に向かって礼拝を行なう。

先頭の稚児が供えた一の神饌が下げられ、2番目の稚児が神饌をやはり本殿にささげ、神主がふたたび今度は榊のついた御幣に対して祝詞をあげる。祝詞の最中に「ウォーーー」という声を張り上げる。神主の祝詞が終わると、稚児が礼拝を行なう。神主はその榊を御輿の左側の鈴縄付近に立てる。次いで3番目の稚児の付き添いが、今度は御輿のクロボウの上に供物を供える。神主は御輿に向かって祝詞を上げ、次いで3番目の稚児が礼拝を行なう。これで神前の神事が終了する。この間約30分ほどであった。

この一連の儀礼は次のように解釈することができる。先頭の稚児は本殿に鎮座する神（水葉女神・ミズハノメノカミ）に神饌を奉納し、神主はこれから例祭がはじまること、そして祭りが滞り

なく行なわれるよう神にお願いする。二番目の稚児は神前の榊に神饌を奉納し、神主は本殿の神に榊に乗り移っていただくための祝詞を唱える。神主が「ウォーーー」という声をあげるのは、神に榊に移っていただくための一種の儀礼である。次いでその榊を本殿から移し、御輿に立てることで神が御輿に移られたことになる。そして3番目の稚児は神がおられる御輿にたいして供物を奉納し、神主は御田神社の氏子が息災であること、作物が順調に育つように願いをこめた祝詞を奏上する。幼い子供は神の使いであり、神に近づくことができる存在であることを髣髴とさせてくれる光景である。この御輿は町内を渡御し、氏子から礼拝を受ける（写真：24）。

山王祭の2日目（4月13日）に、神を祝福するために花渡りという行事が行なわれるが、このときは男の子が稚児をつとめる。これにたいして、5月3日の御田神社の例祭は女の子が稚児をつとめることになっている。男女分業が上手に行なわれている。例祭のお稚児さんは宮番の組から出ることになっているが、子供が少なくなっている今日、宮番以外の組から出してもらうこともあるという。「家の娘は3回も稚児をやったな」とか「千葉から孫娘を呼び寄せて稚児を出した」という話も聞こえ、祭を行なうにあたって青年や子供の確保が難しい時代になったことを物語っている。ちなみに山王祭の花渡り式には例年13組の稚児が出ることになっているが、今年は7組しか出すことができなかったし、御田神社のこの年の例祭は子供御輿を出すことができなかった。

稚児が奉納する神饌は、稲穂、饌米、モロコ寿司、ハス寿司、鯉、秋刀魚の干物、ニンジン、リンゴ、それにお神酒と塩、水である。稲穂と饌米は豊作祈願がこめられており、ニンジン、リンゴは野菜や果物の豊作を願い、お神酒、塩、水はすべてのものを清めるという意味がこめられている。興味深いことはモロコ寿司とハス寿司である。モロコもハスもびわ湖で捕れる小魚で、この地方でよく食べられているフナ寿司と同系統の寿司のようである。モロコもハスもかつてはいくらでも捕れた雑魚であった。しかしながら近年は、ブラックバスなどの外来魚の影響でその数が激減し、例祭には2003年からサバ寿司を用いている。またニンジンの代わりにダイコンを供えることもあったという。寿司類を含めて祭りに使われる食物については別の機会にゆずるが、身近なところでとれるものを多用していることがわかる。



写真24　総祭り。献饌は女の稚児が主役になる。



写真25　若者の組が神輿を担ぎ、子供の組が神輿を先導する。

(3) 御輿の渡御と直会

一連の儀礼が終わると、青年会によって御輿の渡御の準備がはじまる。御輿のクロボウに前後2本のヨコボウを乗せてロープでくくりつけ、さらにシロボウをくくりつける。クロボウは御輿に取り付けられている漆塗りのかつぎ棒であるが、このクロボウの上に直角に取り付けるのがヨコボウで、長さが1.2メートルほどの角材である。このヨコボウにクロボウと並行に左右2本のシロボウを取り付け、やはりロープで固定する。シロボウの長さはクロボウの長さとほぼ同じで、御輿を安定させるために、また御輿の担ぎ手を増やしてその負担を軽減するためである。鈴縄つけと同様に、このヨコボウ、シロボウの取り付けもロープを扱う技術が必要であり、青年会の若者だけではうまくいかない。そのため長老が手本を見せ、その指導にあたっていた。

12時近くになって準備を終え、御輿が渡御に

出かける。先頭に立つのは宮太鼓の集団で宮番組の3人が担当する。太鼓を吊り下げた太い丸太の両端を2人が担ぎ、もう1人が太鼓を叩きながら御輿の先頭を歩く。御輿には2本の端縄が取り付けられており、祭り半纏をつけた子供たち8名ほどがその縄を引いて御輿を先導する。親たちも子供についていくことが多い。御輿の担ぎ手は青年会の若者で、この年は10名であった。御輿の渡御は2回行なわれ、1回目は御田神社の氏子の範囲をまわる。これをオワタリとよんでいる。すでに述べたように、御田神社の氏子は上組、南組、中組、北組、下組の5組に分かれており、その範囲を一通り渡御して40分ほどで1回目が終わる(写真：25)。

次いで12時過ぎから神社の奥の集会場で直会がはじまる。集会場に上るときは、廊下から上るのが礼儀である。また小正月に行なわれる綱引き後の直会と同様、ここでも年齢階梯制が厳しく守られている。若い人がうかつにも上座に座るようなことがあれば、厳しく叱責されるのである。あたりの様子を慎重に見回し、左右の人の年齢を確認してから自分の席に座る。最初に正面の上座の中央に長老が座ると、その両脇に次の長老が座り、あとは年齢順に下まで座ることになる。オワタリを済ませてきた青年会の代表数人は一番下座に座る。あとの若い人々は集会場の中に入ることもできず、外で直会をおこなう。

全員が着席すると正装した宮番が正座をして、この1年間滞りなく勤めを果たすことができたこと、そして氏子の皆さん方の協力を感謝する意味の挨拶をする。その正面には長老が座っている。現在は背広にネクタイ姿になっているがかつては羽織袴であったという。そしてこの直会に参加する人々も正装することになっていたが、今日ではよそ行きの服装をして参加する人が多くなった。5月の例祭の直会は、宮番の引継ぎという重要な行事があるので、次の宮番組にあたる人々は行事の進行状況を真剣に見守っており、直会の出席者も多い。この日の出席者は宮番組を含めて40名ほどであった。

宮番の挨拶が終わるとまず神前に供えられたお神酒が注がれる。お酌をするのは宮番組のメンバーである。宮番組は宮を守り、祭りを準備し遂行する役割であり、直会の祭には酒や肴を準備して氏子の人々を接待する役割もある。話は年齢階梯制に戻るが、前年は最長老がおられる組が宮番であったため、その方がお酌にくると皆恐縮して酒を注いでもらっていたのが印象的であった。たとえ最長老であっても宮番がまわってくると、自分より若い氏子衆に奉仕することになっているのである。

お神酒が一通り行き渡ると一献目の酒が湯のみ茶碗に並々と注がれる。酒の肴はサバ寿司が二切れ、キンカン二つ、そしてチリメンジャコと湯がいたジャコとダイズである。サバ寿司は近年になって出されるようになったことは前述したが、この年は珍しくモロコ寿司も出された。宮番組の一人が冬の間に捕れたモロコを塩漬けにして、この日にあわせて寿司用に調製したものであった。非常に口当たりがよく食べやすいものであったが、かつてのモロコ寿司はかなり匂いがきつく、生臭さが残っていたという。またキンカンは氏子の一人が差し入れたもので、サルの被害にあわないように木の周囲を網で囲うなど、丹精して育てたものであることが報告された。

人々はこのような肴をつまみながら酒を飲み、お互いの近況を話し合い、昔の祭りと現在の祭りの変化の様子を懐かしそうに話し合っている。長老たちは青年時代の話に花が咲くことが多い。茶碗の酒が少なくなるとすぐ宮番組が注ぎにきて、また茶碗はあふれんばかりになる。このようにしてしばらくすると「アイノテにまいります」といって、また宮番組が酒を注ぎにまわる。なるべく時間をかけて酒を注ぎまわり、たくさん飲んでもらうことがよい宮番であり、それを受ける氏子衆はなるべく早く二献目にするように要求する。その駆け引きが面白い。この駆け引きは三献目までつづく。

この年は比較的早めに二献目に移った。青年会の若い衆が二度目の御輿の渡御に出かけるというのがその理由であった。「少々早いですが、青年会がゴエンワタリに出かけますのでこれから二献目にまわります」というあいさつがあり、全員に酒が注ぎ終ると、青年たちはそれを一気に飲みほして、境内に安置された御輿を担いで町内に出かけていった。二度目の渡御を「ゴエンワタリ」と

いい、今度は氏子の１軒、１軒をまわり、その玄関先で家族の人々の拝礼を受ける。そのときに酒、もしくは献酒料という名目でお賽銭をもらう。これがこの年の青年会の活動費として使われる。

一方直会の会場では、二献目が注ぎ終わると宮番からの会計報告がおこなわれる。やはり宮番が正座をして収入と支出の金額を正確に読み上げていく。前年の例祭から小正月前までの会計報告は１月の直会で済んでいるので、このときは小正月の綱引き、そして祈年祭と例祭の会計報告になる。報告が終わると報告書と預金通帳を長老の元に持っていき、次いで全員にまわして確認を求める。会計報告が承認されると、その年の事業について報告があり、今後問題が残る場合はこの関で相談をして、次の宮番組に申し送りをする。

たとえば、この年は何者かによって御輿倉の鍵が壊されたので、新しい鍵を購入したという報告があった。幸い御輿倉は二重に鍵がかけられていたので大事には至らなかったが、余分な出費があったこと、近江地方では各地で寺社の文化財が盗難に遭っていることから、今後注意して見回りをおこなうことが申し渡された。また境内のケヤキとサカキが大きくなりすぎたので、造園業者に頼んで枝打ちをしてもらうこと、その経費についての報告があり、了承された。サカキは本殿に供えるために植えたものであるから、宮番は時々枝を打って、使ったらどうかという意見も出された。本殿には冬は毎月１日に、夏は毎月１日と 15 日にサカキを替えることになっている。

また本殿の屋根を修理する時期にきていること、昨年の台風でクスノキの大きな枝が吹き飛んで築地塀の瓦を壊したのでその補修などが話し合われた。屋根の修理については 300 万円ほどの見積もりが出ており、今すぐには対応できないのでもう少し時間をかけて氏子から募金をあおぎ、数年後に大修理をすることが確認された。

以上のように直会の席上では宮の管理や祭りのことなど、さまざまなことが話し合われる。一つ一つの議題はまず長老に報告され、その後氏子衆がさまざまな意見を出していく。年長の人でも羽織袴姿でドンと控えている長老の前では、何となく恐ろしくて意見を言うことができなかった、という話をする人は多い。しかしながら話し合いのシステムとしては、たとえ若い者であっても自らの意見を述べる機会が均等に与えられていることになっているのは西日本的で面白い。そして一通り意見が出尽くしたところで、長老が裁定するというのがこの場での議論の方法である。長老の裁定に反論をするものもあるが、間違った方向ではない限り従うことになる。（写真 26、27）



写真 26　直会。長老が上座に座り、年齢が若くなるに従って下座に着くというルールがある。



写真 27　宮番（左）は直会の席上で会計報告、および神社運営に関する問題点を提示し、次の宮番へ引き継ぐ。



写真 28　宮番の引き継ぎ。右側が今年の宮番組の代表。中央が宮番。

このような議論がたたかわし、一通りの報告が済み、これからの問題が引継ぎされると三献目に入る。宮番が「それでは三献目にまいります」と挨拶して、酒を注ぎにまわる。すでにだいぶ酩酊している人もおり、直会はおひらきが近くなっていく。時間は午後2時をまわっている。テーブルの上の残った肴を口に運び、並々と注がれた酒を飲み干すと、まず長老が席を立つ。続いて年長のものから順に席を立っていく。このときに1人1人に1月の綱引き行事にはミカン、5月の総祭りには粽が配られる。とりわけ杉尾神社（図4）の粽は評判が高く、この神様は喉から上の病気を直してくれるという。杉尾神社でもらった粽は玄関に下げておき、喉が痛くなったときに硬くなった粽を削り煎じて飲むという。御田神社の粽は甘く味付けした餅を笹でくるんだもので、家に持ち帰り家族でありがたくいただく。

集会場に上ったときと同様、それぞれは廊下から降りて外へ出る。集会場の玄関前には宮番組の人々が整列をして見送る。人々は丁寧に挨拶を交わし、本殿に礼拝して家路に着く。すでに神様は本殿から御輿に移っているが、お参りをしないで帰る人はいない。

この日を境にして宮番が交代するのであるが、直会が済んだ後、集会場では旧宮番と新宮番の組が書類や鍵の受け渡しなど、さらにこまごまとした引継ぎをおこなう。新宮番組にとってはこれから長い1年が始まるのである（写真28）。

直会の途中で出て行った御輿は町内を渡御して、夕方の6時頃に宮に帰ってくるが、この御輿は新宮番組が迎えることになる。御輿は金具類や鈴縄をはずして箱に収め御輿倉に納める。新宮番組の初仕事である。そして日暮れが近くなると灯明をともし、境内で焚き火をたいてお参りにくる人々を迎える。春の例祭を惜しむように、氏子の人々が三々五々参拝に参り、新宮番組に神社の管理をお願いする。参拝者は午後10頃になると途絶え、長かった祭りの一日が終わる。翌日宮番組は境内の掃除をする。

まとめ―日吉山王祭を支える力

以上みてきたように、組織の最小単位である「お組」を基本として、各町内に鎮座する神社の氏子にいたるまで、幾重もの人のつながりがあり徐々に組織が拡大するとともに、各組織は微妙にその構成員が変わっている。この理由については何らかの理由で企図された形跡がみられるのであるが、具体的に明らかにすることはできていない。一般には人の出入りにより、元の形が変化していったことが理由としてあげられる。坂本は近世以来、農民の割合が高かったものの農業以外で暮らしを立てるものもあり、町場の特徴として人の出入りが意外と激しい所であった。このことについてはすでに述べた。

構成員のずれについては以下のような体験がある。私が御田神社の氏子に加えていただいたとき小さな出来事があった。現在の私の住まいは上組に位置しているのであるが、前の住人が中組に加わっていたため私も中組に入ることになった。住まいの位置の関係から、当初上組からの強い誘いがあり、直会の席上で双方の組から所属の問題が提出された。十分議論した結果、「それでは中組に入りなさい」という長老の一言で決まった経緯がある。坂本では長老の言葉には重みがあり、よほどのことでは覆ることはないという。この場合、私の前の住人がなぜ上組に加わっていなかったのか、ということが問題になるのであるが、今となってはその理由を探ることはむずかしい。

次に日吉山王祭を支える組織の問題である。この場合は各町内に鎮座する神社の氏子集団が基本単位になっている。山王祭を支える組織として、坂本（上坂本）には中部駕輿丁、至誠駕輿丁、広芝駕輿丁の3駕輿丁があり、下阪本には下阪本駕輿丁がある。駕輿丁は神輿の運行に責任を持つ集団で、若者が中心になる。4月12日、13日に行われる東本宮系の祭りでは、東本宮（二宮）、樹下宮、牛尾宮、三宮の4基の神輿が主役になるが、4駕輿丁がそれぞれ役割を分担して、神輿の運行にあたっている（図4、5）（写真29、30、31、32）。

町内における駕輿丁の構成は以下のとおりであ

る。たとえば御田神社の氏子が加わっている中部駕輿丁の場合、10 社の氏子が駕輿丁を構成しており上坂本の鎮守の約半数を占めている。現在の新しい坂本の区割りは 1 区から 13 区までを数えるが、中部駕輿丁は 1 区から 5 区までがその範囲になる。また下阪本駕輿丁は下阪本（人口 2000 人ほど）全体で構成されるのでこちらも非常に広い範囲にわたっている。駕輿丁の中心になる神社は酒井神社と両社神社でその氏子中が中心になる。下阪本には日吉大社、およびその宮司家とかかわりの深い神社も数社存在するので、その氏子衆も山王祭に関わっているであろう。これに対して広芝駕輿丁は坂本 8 区の住民が受け持っており、1 社（興玉神社）の氏子が中心になっている。また至誠駕輿丁は、13 区（昭和 40 年代に新たに誕生した団地で神社をもっていない）を除き、その他の区（6、7、9、10、11 区）で構成されている。

ただし現在の駕輿丁は戦後になって再構成されたものであり、古い時代は全く異なった構成であった。そのあり様は近世までさかのぼることができるのであるが、それは比叡山の各塔（西塔、東塔、横川）と各谷（西塔 5 谷、東塔 5 谷、横川 6 谷）の存在と深くかかわっており、上坂本、下阪本のほかに、延暦寺と縁の深い広範な地域から駕輿丁として、また応援隊として祭りに加わっていた。その中には京都愛宕郡一乗寺村、修学院村、八瀬村、高野村等が含まれている。この問題は坂本の町の組織から離れること、またかなりの紙面を要するため別の機会に改めて報告したいが、坂本における講組織や駕輿丁の変遷をみていくだけでも、文化とは時代の変化に対応する形で継承されていくことを教えられる。



写真 29　神輿だし。祭りの裏方をつとめることも駕輿丁の重要な役割である。



写真 30　駕輿丁による神輿の移動



写真 31　読み上げ（神輿を担ぐ位置を確認すること）場に向かう駕輿丁。先頭を行くのはハナという。



写真 32　読み上げ場で点呼を受ける駕輿丁

参考文献

吉田ゆり子「神仏分離と門前町坂本」『東京大学日本史学研究室紀要第二号』1998
吉田ゆり子「近江国志賀郡上坂本川瀬俊一家文書史料細胞現状記録」『東京大学日本史学研究室紀要第二号』1998
山田恵諦ほか『比叡山門前町坂本』近江文化社 1980
柳田国男編『分類祭祀習俗語彙』角川書店 1963
数野卯吉『坂本の神々（1 ～ 3)』坂本の歴史を語る会 1989
『日吉御田神社年中行事宮番参考』上組 1940　昭和 15 年
『日待勘定並に取決覚書』御田町上組 1979　昭和 54 年
『日吉御田神社御宮屋根葺替篤志人名簿』氏子総代中当番上組中　明治 32 年
『氏子人名簿』日吉御田神社上組 1960　昭和 35 年
『町内取決覚帳』御田町上組　1927　昭和 2 年～昭和 54 年
『愛宕講掛□並ニ勘定帳』御田町 1891　明治 24 年 1 月～明治 45 年
『愛宕講勘定帳』御田町 1913　大正 2 年 1 月～昭和 26 年
『御田神社諸入用控』上組中　明治 5 年正月～昭和 20 年
『諸色買物帳』御田 15 軒　明治 28 年
『日待勘定帳』御田町　昭和 27 年 1 月～昭和 53 年
『日待勘定並に取決め覚帳』昭和 54 年 1 月～平成 19 年
『山王講・みたらし祭・節分祭関係書』昭和 52 年～昭和 55 年
『中之町若中帳箱之一件』御田町若中　文政 6 年 9 月 3 日
『御田町若イ者入之談合』御田町若中　文化 14 年丑年正月
『町儀定之事』御田町　文久 3 年正月
『町儀定之事』御田町　明和 5 年戌子歳 9 月
『再建御寄付帳』年代不明